

第4回支援報告会から



■■引地台中学校 3年 藤原弘輝■■

今日は、冬休みの間に、校長先生たちと一緒にいった、宮城県石巻市での、ボランティア活動の様子をお話ししたいと思います。活動の中身は、地元の小学生たちを集めて、一緒に勉強の手伝いや遠足に出かけたり、時には悩みを聞いてあげたりしています。この活動は去年の5月から続いているものです。

現地では、震災の影響で、皆いろいろな生活を送っています。仮設住宅に住んでいる子ども達もたくさんいます。その中で、僕は「かんちゃん」という小学5年生の男の子に出会いました。

そのかんちゃんが、はじめて石巻に来た僕に、震災のときの様子を、聞かせてくれました。「あのとき、お父さんや、お母さんが本当に死んでしまったかもしれない…」と本気で思ったそうです。その後、両親とは避難所で再会して、涙が止まらなかったそうです。そのくらい、すさまじい揺れだったようです。避難所では、いくら疲れていても眠ることが出来ない生活が、約1ヶ月以上も続いたようです。

みなさんも、テレビのニュースなどで、被災地の映像を見たことがあると思いますが、実際に、自分の目で見た光景は、まったく別の世界でした。

僕もいままでは、テレビを見ながら「かわいそうだな」「大変だろうな」くらいしか思えませんでした。実際に見てみて、色々なことを想像することができました。例えば、ビルや駅が流されるほどの津波の大きさや、波が迫ってくる恐怖や苦しさなどです。被害の大きさを見て、どれだけ必死で逃げても助からないような場所もたくさんありました。

テレビでは、明るく振舞う被災者の様子を、最近ではよく見かけますが、実際に、いまだ手付かずのガレキや、何も無い町を見下ろして見て、悲しみや寂しさが強く残っていました。

小学校3年生の「ゆか」という女の子が、「あの壊れた車が、ずっとあそこにあるのは、多分持ち主が津波で死んじゃったからだよ。」と教えてくれました。

年明けに行ったときには、「私は、『あけましておめでとう』って言えないんだよ。」という子もいました。僕はそのとき、なんと言葉をかけていいのか分からず、「そうなんだ〜」と、ただ、うなずくだけでした。

最後に、かんちゃんが、このように言っていました。

「『がんばろう日本。がんばろう東北。』はやめてほしい…」と言いました。この会話を聞いていた周りの子供たちも、「がんばれなんて言われても、ムカつくだけ。」とそれぞれ言っていました。そこで、子供たちに「なんて言われたら嬉しいか？」と聞くと、少し考えたあとに、「一緒に、復興しましょう」とかがいいと言っていました。僕は、子供たちの本音の部分が聞けたような気がしました。

このように、現地の子供たちと、色々な活動を通して、本当に大切なことはなにかと考えるようになりました。

国会議員のような偉い大人でなくても、小さな活動をみんなで協力すれば、また東北を復興させることが出来るのではないかと思います。

往復で約1000キロの移動ですが、これからも、いま自分ができることを、少しでもいいからしていきたいと思いました。

■■教育支援チーム「まつ」事務局長 白井 美穂■■

私は、陸前高田市小友町という小さな町に住んでいます。そして、現在4歳の双子の子供がいます。

3月11日14:46に東日本大震災は発生しました。高台にある我が家でさえも被害の程度は一部損壊で、家は残りましたが波はすぐそこまできました。現在もそこで生活しています。今までの町並みはなく、千町田と呼ばれた田んぼの風景も綺麗な砂浜や牡蠣の養殖施設や船もほとんどありません。震災当初より片付いたものの瓦礫の山と残された車や船の残骸、整備できていない道に、決壊した防波堤が今もなおあります。復興という言葉が未来を指す明るい言葉とともに、いつとも分からない本当にその時が来るのかという不安や先の見えない言葉のようにも感じます。

しかし、このような状況でも子供たちの笑い声や笑顔は、大人や地域を元気にしてくれます。これからの担い手である子ども支援をすることで、町や人が復興していくことをEd.ベンチャーさんや連携団体のすたんどばいみーの支援活動を通して感じました。

Ed.ベンチャーさんとすたんどばいみーさんとの出会いは、オートキャンプ場モビリアという避難所で毎週末子供支援に来ていただきました。避難所生活をしている子供たちと遊びや勉強を通して集団生活の中で、大人のルールに我慢していた子供達の新たな居場所を作っていただきました。現在は、368世帯の仮設住宅がたち生活しています。また、Ed.ベンチャーさんの活動の中の学校支援で週に1度、学校訪問をしています。その中でニーズを聞く現地スタッフとして活動が始まりました。被災した学校を支援することにより、学校が子供たちの居場所づくりであるようにその学校にあった教育備品などの支援を現在もおこなっています。しかし、学校の予算が不安定であることや地域の再建が見えない中、教職員に過剰な負担が押し掛かっています。そこで、連携をとりながら学校や教職員を支援するとともに子供を長期的に見守る組織として地元で根差した支援活動をめざし教育支援チーム「まつ」を立ち上げました。現在立ち上げにご協力いただきながら、1/31に開催する学校支援連絡会の開催し、各校のニーズ把握とともに子供たちの様子や取組の情報交換を行う予定となっています。1/10.11には小友中学校にて学習支援も実施しました。学校に納品している備品に関して、まだまだニーズ

はあり支援なしには再建が難しいと感じました。それと同時に地域だけではどうにもできない現状もあります。このような大きな震災で沢山の人の力や協力があったことを実感しています。そして、感謝の一言しかありません。

3/11、震災当日。私は、陸前高田市の隣町の大船渡市にて訪問介護員として利用者宅にて、いつもと変わらない時間をすごしていました。いつもと変わらないその日は立ち上がれないほどの揺れとともに消えていきました。やがて、津波は町や人をあっという間に奪っていきました。防災無線、地鳴りやバキバキという壊れる音。いとも簡単に流れる家、車、船。必死で逃げる人、泣きながら非難する女性。逃げろーと何度も叫ぶ男性、ただただ津波を前に消えていく街並みを立ち尽くして見るほかにありませんでした。利用者を避難させ、家族へ返すまで高台の避難場所にいました。すでにライフラインも途絶えていました。何が起こったか分からなく、どこか他人事のような気持ちでした。それと同時に、後数分違えば私は今ここにはいませんでした。また、恐怖感もありました。今でも、その時の風景、利用者の手のぬくもり、逃げる人の声、表情、逃げてきた高齢者の手を引いた時の手の冷たさは今でも鮮明に覚えています。あの黒い波は、あっという間に全てを奪ったのです。

利用者を家族に帰した後、急いで我が子を保育園に迎えにいきました。偶然にも保育園の近くにいたので、直接保育園へ走って行きました。すでに、園児は一人もいませんでした。先生と地域の人が背負い、手をひき逃がしてくれたとのことでした。安心したのもつかの間、「もっと波が来るぞー、逃げろー」とどこからともなく聞こえてきました。すぐ目の前まで瓦礫とともに波が来ていました。何度も余震を感じながら非難した場所と思われる小学校に走って、走って向かいました。校庭には、逃げてきた車、人がすでに40名以上はいました。そこには泣いている子や遊んでいる子、まだ何も分からない乳児など先生と共にいました。何人か保護者が迎えにきて帰って行く子もいましたが、未だ保護者が迎えに来れない子もたくさんいました。娘と息子を見たときに思わず泣いてしまいそうになりました。娘は、泣いており大人の側を離れませんでした。今でも余震があると怖がったり、大人にしがみつきます。息子は「僕地震怖かったけど男だから泣かなかったよ。ひいろちゃん守ったよ。ママも守ってあげるね。」の一言に自分も不安だったはずの子供のその言葉に胸に刺さりました。私も子供もここに避難している人はみな生かされたんだなと思いました。何があっても生きなければと思った瞬間でした。その晩は、小雪がちらつく中、近所の人提供してくれたテントで懐中電灯、園児の布団を借りて過ごしました。「喉乾いた」「お腹減った」の言葉に子供へ与えるものがありませんでした。近所の方や保育園などがおやつを提供してくれ、非難していた人みんなに分け合いました。

翌日家へ帰ろうと陸前高田へ向かいました。いつも通う道路は寸断され、ガソリンが少ない中、遠回りの1本の道に行く他にありませんでした。避難した小学校を出る時、知り合いの消防団より高田にはいくな、大船渡の比じゃない。行くなら山目指せとのこと聞きました。ガソリンのメーターを何度もみながらようやく小友につきました。一面なにもなく、海でした。水位は減った様子で瓦礫と壊れた道路だけでした。車が行けるところまでいき、偶然再会した両親とともに子供を背負い山を越えモビリアを目指し

ました。そこには、地域の人や近隣で仕事をしていた人などが避難していました。生かされたと言う思いや何か自分にもできることがあるのではないかと思い、緊急時に備えカルテを作成したらよいのではないかと思いました。数日間、陸の孤島になったモビリアは透析患者を救急搬送できる手段は、ヘリに気づいてもらい搬送することだけでした。介護福祉士であることや血圧計をもっていたので、医療行為はできなくとも避難している人すべてに名前、年齢、生年月日、住所、どんな薬をのんでいたか、既往歴はなにかなど血圧を測定しながら体調などきいて回りました。仮設に入居するまで、見守りを兼ねて話をしながら行っていました。徐々に生活が落ち着く中、モビリアはマスコミや支援物資の対応で避難所生活をしている人が対応に追われました。仮設に移った今もそうです。モビリアには、避難所対応した自治会長や元モビリア支配人でNPO法人設立して物資の配布やイベントの対応など自治会のサポートをしています。私も避難所よりその対応をしてきたので支援の在り方に疑問を持つ点がありました。支援なしには避難所や仮設住宅生活ができない中、対応する地域負担になることや地域の流れや意向を無視して活動したり、中には観光気分できた人もいました。支援に来ましたといって泊まるどころも確保せず、食事も準備せず自己完結できない団体やボランティアさんがいました。今一度、目的や誰のためにするのか地域の声とニーズと合致しているか、地域性や風土に方向性や活動があるか考えてほしいと思います。また、地域のことについてもこちらから発信できるよう努力してまいりたいと思います。3.11のこと、陸前高田での思い出など、この震災で今までつながることのなかった人や陸前高田に思い入れをもっていた方がふえるよう、たくさんの支援に感謝しつつ復興に向けて、じぶんのできることをしていきたいと思っています。津波は、たくさんの物をうばいましたが、こんなにも、人をつなげ、新しいつながりができたことは、悪いことばかりではないと思いました。

いずれは、外部の支援なしに立ち上がるためにも外部と地域との連携はとても重要です。人と人のつながりを大切に、少しでも橋渡しやきっかけになるよう活動していけたらと思います。地域や子供たちと一緒に、今生きる私ができることをしていくことで何かもお役にたてればと思います。

今後とも陸前高田や子供たちによりよい支援ができるようご協力、ご支援をよろしくおねがいいたします。

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通 6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイエン)

NPO 法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業